



Title	幼児の色彩認知に関する研究
Author(s)	松岡, 重博
Citation	教育科学研究報告, 7, pp.7-16; 1961
Issue Date	1961-06-30
URL	http://hdl.handle.net/10069/31775
Right	

This document is downloaded at: 2019-02-19T17:21:05Z

幼児の色彩認知に関する研究

松 岡 重 博

I 研究目的

子供の表現は、でたらめなぐり描きや、でたらめなかきませ活動から、漸次形のまとまった表現へと進む。しかし、幼児の表現活動は形の上からは、どうやらまとまったものになってはいても、子供の活動そのものは活動の前から何をかくといった定まった態度をとることが出来がたく、それが出来るようになるのは満5才頃といわれる。このようにして表現される絵や物は、大きい子供のそれと比較して色々の特徴を示すといわれる。その一つとして、常にある定まった形、色をもって対象を表現すること、即ち、図式的であることがあげられる。幼児は表現するにあたっては、何を表現するにも自分が知っている通りに表現しようとする。写生的ではなく、自分の頭の中にあるものを表現する。即ち、観念的であるといえる。更に幼児の表現は体験全体の表現であり、心的内容の表現であることがあげられる。この意味での幼児の表現は独自の表現であり、意味をもった表現であるといえる。

さて、すべての造形活動は形と色とで表現され、形と色とで絵として製作品として意味が構成される。心的内容が形をもって色をもっていろいろに表現されてくる。それだけに形と色についての豊かな感覚とその性質の認識は、造形活動発達の上から重要な位置をしめてくるといえる。そこで本研究では幼児が種々な形や色について、どのような認識理解をしているかを発達的に明らかにすることを目的とした。そして今回は色彩についての認知がどの程度分化しているか、各色彩についての感覚的、感情的分化発達を **Semantic Differential Test** によって明らかにすることを試みたものである。

II 研究の手続、及び方法

- (1) 対 象： 4才児 20名 (男10, 女10) 5才児 78名 (男46; 女32) 6才児 20名 (男10, 女10)
(3 幼稚園及び1小学校より無作為抽出)
- (2) 実施期間： 35.6.15~35.9.31
- (3) 材 料： 純色の標準色紙 (10cm²) をボール紙で裏うちしたもの。赤、橙、桃、白、黄、緑、青、紫、茶、黒の10色を使用
- (4) 方 法： すべて個人面接対話形式で行い、まず材料を順次提示してその正しい名を口答でいわせた。ついで材料をすべて提示して「この色の中で一番熱いと感じる色を一つとって下さい。」と指示して、幼児がとった色名を記録。ついで「それでは二番目に熱いと思う色を一つとって下さい。」と指示、記録。更に、「それではつぎが一番つめたいと感じる色を一つとって下さい。」と指示、記録。ついで、「では二目番につめたいと感

じる色を一つとって下さい。」と指示，記録。同じように次の感じ対について順次実施した。

1. 熱 い — つ め た い
2. か た い — や わ ら か い
3. 明 る い — 暗 い
4. う れ し い — か な し い
5. や さ し い — こ わ い
6. き も ち の よ い — き も ち の わ る い
7. 強 い — 弱 い
8. 男 の よ う な — 女 の よ う な
9. わ か い — と し よ り

以上の形容詞対は幼児の日常会話の中から，比較的多く用いられているものをえらび，そして1～3 感覚的，4～6 情緒的，7～9 活動的，判断を示すものに限定した。

Ⅲ 結果の整理と考察

1. 幼児の色彩の名についての発達

幼児の色彩名についての知名度を百分率で表示したのが第一表である。

(第一表) 色の名についての正答率表

年 令	性 別	提 示 色	赤	橙	桃	白	黄	緑	青	紫	茶	黒	平均
		4才	男	100	80	80	100	100	50	50	30	80	100
	女	100	50	90	90	100	60	20	40	40	100	69	
	計	100	65	85	95	100	55	35	35	60	100	73	
5才	男	100	80	89	96	93	78	71	60	80	100	85	
	女	100	77	100	100	97	87	87	77	87	100	91	
	計	100	73	93	98	95	81	77	67	81	100	87	
6才	男	100	80	100	100	100	90	90	90	90	100	94	
	女	100	100	100	100	100	100	90	90	100	100	98	
	計	100	90	100	100	100	95	90	90	95	100	96	

第一表の結果から見ると，まず，赤，黒，黄の色が最も早く分化し，ついで白，桃，そして橙，茶などが分化している。青，紫は少し分化がおくれる傾向を示している。また年令と共に正答率は高くなっているが，4才児では男子がすぐれ，5才，6才児では女子がすぐれる傾向を示している。幼児の色彩の名に関する分化は差異性の著しいものから分化し，さらにその分化過程には環境としての衣服習慣や，生活習慣や，社会的色彩習慣などの影響があることも伺える。そこでこれらの傾向を更に深く検討するため S. D. Test の結果を次に整理し検討し

てみると次の如くである。

2. 幼児の色彩に対する感じの発達

一般に、ある事象についての個人のイメージとか、感じとかは、極めて、漠然としたものであって、これを具体的な言葉であらわすとか、その程度を尺度に示すとかいうことは非常に困難である。これを解決する一つの方法として、近年 Charles E. Qsgood 等により、Semantic Differential Test が考案され実用化されつつある。ここで色についての幼児の感じの明瞭さを調査するについて、これを明確に引出すことの困難性を打破するため、S. D. T. を応用した。即ち、方法の項での各形容詞対の「一番……」としてえらんだ色に2点、「二番……」としてえらんだ色に1点、残りの色を0点とし、形容詞対の左側の形容詞の方向にえらばれた色に正の点数、右側の形容詞にえらばれた色に負の点数を与えることで尺度上に各色を位置づけた。そして各色各形容詞別に尺度上の得点を合計し平均したのが第二表である。

(第二表) 全幼児の色に対する感じ表 (N=118)

	赤 (R)	橙 (O)	桃 (Pi)	白 (W)	黄 (Y)	緑 (G)	青 (Bl)	紫 (Pu)	茶 (Bn)	黒 (Bk)	明瞭さを示す S. D.
1.あつ い—つめたい	.8	.2	-.4	^{△△} -1.1	-.2	0	0	0	.2	.5	0.48
2.かた い—やわらかい	-.1	-.3	-.2	-.3	-.3	-.2	.1	.2	.5	.6	0.31
3.あかるい—く ら い	.9	.6	.2	.1	.8	.2	-.1	-.1	[△] -.7	^{△△} -1.9	0.77
4.うれしい—かなしい	.2	.3	0	-.2	.4	0	.1	-.2	.1	[△] -.5	0.25
5.やさしい—こ わ い	.4	.5	.4	.2	.3	.2	.1	0	[△] -.7	^{△△} -1.4	0.56
6.きもちよい—きもちわるい	.3	.3	.1	.1	.5	.0	.3	0	[△] -.5	^{△△} -1.1	0.44
7.つ よ い—よ わ い	0	0	[△] -.6	[△] -.5	[△] -.5	-.1	.1	.1	.4	^{△△} 1.1	0.47
8.男のような—女のような	^{△△} -1.4	[△] -.9	-.3	.1	-.3	.4	.6	.2	.6	1.0	0.69
9.わ か い—としより	.2	.3	.4	-.1	.2	-.3	.1	-.1	[△] -.5	^{△△} -.3	0.28
S. D.	0.60	0.45	0.33	0.43	0.42	0.20	0.23	0.13	0.50	1.05	0.50

註 [△] 明瞭なもの ^{△△} 極めて明瞭なもの

この表によって、各形容詞対ごとに得点値の順に配列すると、

- ① あつ い～赤, 黒, (茶橙), (緑青紫), 黄, 桃, 白～つめたい
 - ② かた い～黒, 茶, 紫, 青, 赤, (桃緑), 橙, 白, 黄～やわらかい
 - ③ あかるい～赤, 黄, 橙 (桃緑), 白, 青, 紫, 茶, 黒～く ら い
 - ④ うれしい～黄, 橙, 赤 (青茶), (桃緑), (白紫), 黒～かなしい
 - ⑤ やさしい～橙, 赤, 桃, 黄, (白緑), 青, 紫, 茶, 黒～こ わ い
 - ⑥ きもちよい～黄, (赤橙青), (桃白) (緑紫) 茶, 黒～きもちわるい
 - ⑦ つ よ い～黒, 茶, (青紫), (赤橙), 緑, (白黄) 桃～よ わ い
 - ⑧ 男のような～黒, (茶青), 緑, 紫, 白, (黄桃) 橙, 赤～女のような
 - ⑨ わ か い～桃, 橙, (赤黄), 青 (白紫), (緑黒), 茶～としより
- …… 但し () は同じ得点を示す。……

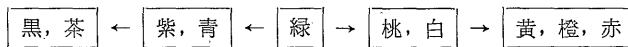
以上のような結果から、幼児が尺度上で明らかに対立した感じをもつ色をぬきだすと、

- ① 赤, 黒 …… 白, (桃) ⑥ 黄, (赤, 橙) …… 黒, 茶
- ② (黒, 茶) …… (白, 黄, 橙) ⑦ 黒, (茶) …… 桃, 白, 黄
- ③ 赤, 黄, (橙) …… 黒, 茶 ⑧ 黒, 茶, 青 …… 赤, 橙, (桃, 黄)
- ④ (黄, 橙) …… (黒) ⑨ (桃, 橙) …… 茶, (黒, 緑)
- ⑤ 橙, (赤, 桃) …… 黒, 茶 …… 但し () はややその傾向を示す。 ……

このような結果から幼児が色に対して感じる内容を色彩別に性質づけて見ると、

色別	極めて感ずる	かなり感ずる	やや感ずる
赤	・女のような	・あかるい ・あつい	・やさしい ・きもちよい
橙		・男のような ・あかるい ・やさしい	・やわらかい ・きもちよい ・うれしい ・わかい
桃		・よわい	・つめたい ・わかい ・やさしい ・女のような
白	・つめたい	・よわい	・やわらかい
黄		・あかるい ・きもちよい	・やわらかい ・女のような ・うれしい ・やさしい
緑			・男のような ・としより
青		・男のような	・きもちよい
紫	(感じとして特色がない)		
茶		・かたい ・こわい ・としより ・くらい ・男のような	・つよい
黒	・くらい ・きもちわるい ・こわい ・つよい ・男のような	・あつい ・やわらかい	・としより

以上のような結果から、幼児は各色彩にそれぞれちがった感じを示しているが、その中で比較的近い感じとして受けとられているものをまとめると、まづ(黒と茶)が顕著であり、この二色と全く反対の感じを与えているものが(黄, 橙, 赤)である。ついで(紫と青)が近くこれらの関係を系統づけると、



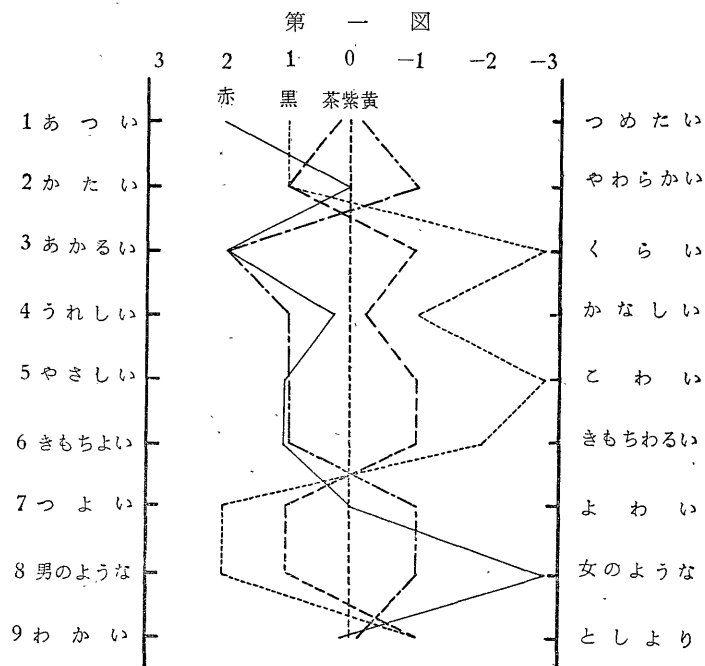
となる。

次にこのような感じの分化発達を検討するため、各形容詞対の項目ごとに、尺度上での0の点を基準として S. D. (標準偏差) の形で示すと、(あかるい—くらい), 及び(男のような—女のような)の感じでは各色距離のへだたりが大きく、ついで(やさしい—こわい)が大きい。即ち、感覚的には(あかるい—くらい)が、情緒的には(やさしい—こわい)、活動的には(男のような—女のような)の感じの判断がより明瞭であるといえる。これに対して、各色彩に対する感じの差が明瞭でなく、十分な分化発達をしていないと思われる感じは、(わかい—としより) (かたい—やわらかい) 及び(うれしい—かなしい)である。

また各色彩ごとに固有な感じを明瞭に示す色は(黒)で、ついで(赤, 茶)が顕著に一致した特徴を示している。これにつぐものが(橙, 白, 黄)である。逆に色としてほとんどその特色を示さないで感じの固定していない色は(紫, 緑, 青)である。

以上の結果を第一項の色彩名の知名度と照合して考察すると、(黒, 赤, 黄, 白)は4才児ですでに100% 或はそれに近い正答率を示している。ついで(茶, 橙)も高い率を示している。これに対し、(紫, 青) ついで緑はほとんど50%以下である。ことに紫は困難性を示している。このような色彩名についての分化発達には、全く色彩についての感じの分化発達と相応している。感じの差異性の最も明瞭な黒, 赤から早く発達し、紫において最もおくれる。幼児の概念は対象の差異性の認知から構成されるということの一面を実証している。

以上の結果から各色の感じの差異性をよく把握するため、全幼児の得点の S. D. を一単位として、0の点からの距離で各色の感じをプロフィールしたのが第一図である。



3. 幼児の色についての感じの年令発達

年令別に前項のように整理したのが第三表以下である。

(第 三 表) 4才児の色に対する感じ表 (N=20)

形容詞対	色										S. D.
	赤 (R)	橙 (O)	桃 (Pi)	白 (W)	黄 (Y)	緑 (G)	青 (Bl)	紫 (Pu)	茶 (Bn)	黒 (Bk)	
1. あつ い—つめたい	.7	.2	-.3	△△ -1.3	-.3	.0	.3	.3	.2	.3	0.52
2. か た い—やわらかい	-.1	-.4	-.1	-.2	0	-.2	-.1	.3	.6	.2	0.28
3. あかるい—く ら い	△△ 1.1	.7	.1	-.2	.5	0	.1	.1	△ -.9	△△ -1.8	0.78
4. うれしい—かなしい	.3	.2	-.1	-.3	.4	.1	-.2	-.1	.1	-.5	0.27
5. やさしい—こ わ い	.3	.4	-.1	.5	.1	.3	.2	.0	-.5	△△ -1.3	0.53
6. きもちよい—きもちわるい	.3	0	.1	.1	.2	.1	.1	.4	-.4	△ -.7	0.31

つづく

形容詞対	色										S. D.
	(R)	(O)	(Pi)	(W)	(Y)	(G)	(Bl)	(Pu)	(Bn)	(Bk)	
7.つよい—よわい	.1	-.1	-.3	-.4	-.3	-.3	0	-.1	.3	1.1	0.42
8.男のような—女のような	$\triangle\triangle$ -1.6	$\triangle\triangle$ -1.0	-.2	.1	-.2	.4	.7	.2	.5	1.1	0.76
9.わかい—としより	.2	.2	.6	0	-.1	\triangle -.7	-.1	.2	-.3	0	0.32
S. D.	0.71	0.47	0.26	0.50	0.27	0.33	0.28	0.22	0.47	0.95	0.50

(第 四 表) 5才児の色に対する感じ表 (N=78)

1	.5	.1	-.4	\triangle -.7	.1	0	0	-.1	.2	.4	0.33
2	-.1	-.2	\triangle -.6	-.1	-.3	-.1	.1	.1	.4	.7	0.34
3	.9	.4	.1	.2	.9	.1	-.2	-.2	-.5	$\triangle\triangle$ -1.9	0.76
4	.3	.2	.1	.1	.2	-.1	.2	-.2	-.3	-.4	0.23
5	.7	.4	.4	.2	.3	.1	.1	.1	\triangle -.7	$\triangle\triangle$ -1.6	0.63
6	.3	.5	.2	.3	.4	.1	.3	-.1	\triangle -.6	$\triangle\triangle$ -1.2	0.50
7	-.3	-.2	-.4	-.4	-.5	0	.3	.2	.3	1.1	0.30
8	$\triangle\triangle$ -1.1	\triangle -.7	-.4	.3	-.4	.3	.7	.2	.5	.9	0.61
9	.2	.3	.2	-.1	.3	.1	.2	-.2	-.4	\triangle -.6	0.29
S. D.	0.58	0.37	0.35	0.32	0.43	0.13	0.30	0.16	0.45	1.03	0.48

(第 五 表) 6才児の色に対する感じ表 (N=20)

1	$\cdot\cdot$ 1.2	.4	\triangle -.6	$\triangle\triangle$ -1.3	-.3	0	-.3	-.1	.3	.6	0.65
2	-.1	-.2	0	\triangle -.7	-.5	-.4	.2	.1	.5	1.0	0.47
3	.5	.6	.3	-.1	.9	.4	-.1	-.1	\triangle -.8	$\triangle\triangle$ -1.9	0.77
4	.2	.4	-.1	-.4	.6	.1	.4	-.3	-.2	-.6	0.37
5	.2	.6	1.0	0	.6	.2	-.2	-.1	$\triangle\triangle$ -1.0	$\triangle\triangle$ -1.3	0.67
6	.4	.5	.1	.1	.8	.2	.4	-.1	-.5	$\triangle\triangle$ -1.4	0.59
7	.2	.3	\triangle -.9	\triangle -.8	\triangle -.6	-.1	.1	.2	.7	1.2	0.63
8	$\triangle\triangle$ -1.4	\triangle -1.1	-.2	0	-.3	.6	.4	.3	.7	1.1	0.75
9	.1	.3	.4	-.1	.4	-.2	.3	-.2	-.8	\triangle -.2	0.36
S. D.	0.66	0.55	0.52	0.57	0.58	0.30	0.29	0.18	0.65	1.13	0.60

註 \cdot 明瞭なもの \triangle 極めて明瞭なもの

これによると、全体的に年令と共に色に対する感じが明瞭になると共に、各色についての特色が明瞭に把握認識されるようになることを示している。とくに各年令とも、すべての色を通じて感じがはっきりしているのは、(あるかい—くらい)、(男のような—女のような)の感じであり、ついで(あつい—つめたい)、(やさしい—こわい)の感じである。5才から6才にかけ

て更にはっきりしてくるのは、(きもちよい—きもちわるい)、及び(つよい—よわい)で、これにつぐのが(かたい—やわらかい)である。6才児でも困難な感じは(わかい—としより)、(うれしい—かなしい)である。

すべての感じを通じての色の性質の明瞭さの発達を見ると、発達の著しいのは、(桃, 黄)の色で、明瞭性を示す尺度上のひろがり、4才児の(0.26~0.27)から(0.52~0.58)へ大きく発達している。これについて(茶, 黒)の発達が著しい。これに対して6才児まで性質的にはっきりしないのが紫である。(青, 緑)も変化の少ないものである。各感じの形容詞対について、各色ごと距離関係を尺度上で図示したのが、第二図である。

詳細は図によって明瞭であるが、著しい発達上の傾向を示す色を見ると、距離上で2単位以上の変化を示すもの、青の(あつい—つめたい)の感じが(4才が1, 5才が0, 6才が-1)と変化しており、つぎに黒の(かたい—やわらかい)が(4才0, 5才1, 6才2)となっている。更に桃の(やさしい—こわい)の(0, 1, 2), 黄の(きもちよい—きもちわるい)の(0, 1, 2), 黒の(きもちよい—きもちわるい)の(-1, -2, -3)となっている。

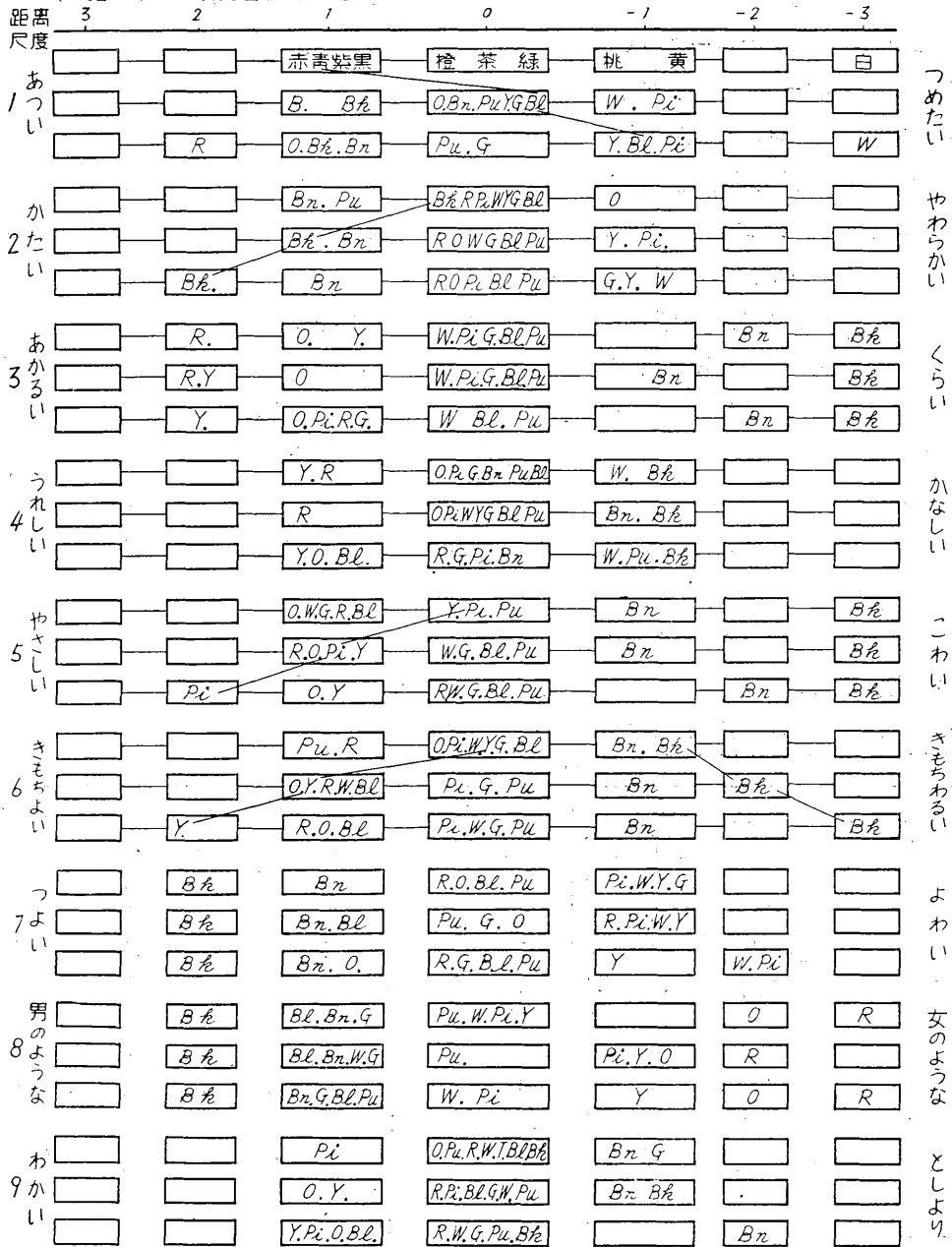
4. 幼児の色についての感じの性差

男, 女別に色に対する感じを前項のように整理したのが第六表である。

(第六表) 全幼児の色に対する感じの性別表

男 子											
	赤	橙	桃	白	黄	緑	青	紫	茶	黒	S. D.
1.あつい—つめたい	.7	.3	-.4	-1.2	0	-.1	0	0	.3	.4	0.49
2.かたい—やわらかい	0	-.5	-.3	-.3	-.3	-.3	.3	.3	.4	.7	0.34
3.あかるい—くらしい	.8	.5	.2	.3	.7	.2	0	-.1	-.7	-1.9	0.75
4.うれしい—かなしい	0	0	.1	-.1	.3	.1	.2	0	-.1	-.6	0.23
5.やさしい—こわい	.3	.4	.4	.2	.4	.2	.1	0	-.5	-1.5	0.56
6.きもちよい—きもちわるい	.2	.3	.1	.1	.4	.0	.3	.2	-.3	-1.3	0.47
7.つよい—よわい	0	.1	-.4	-.6	-.5	-.3	0	.3	.4	1.0	0.46
8.男のような—女のような	-1.5	-.9	-.3	.2	-.2	.6	.6	.1	.5	.9	0.70
9.わかい—としより	0	.3	.2	-.2	.1	-.2	0	.4	-.4	-.2	0.24
S. D.	0.62	0.44	0.29	0.48	0.37	0.27	0.25	0.21	0.43	1.07	0.50
女 子											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	S. D.	
1	.9	.1	-.5	-1.2	-.1	0	0	.1	.2	.5	0.53
2	-.1	0	-.2	-.4	-.3	-.1	-.1	.2	.5	.5	0.29
3	1.0	.6	.1	.1	.7	.1	-.1	0	-.7	-1.8	0.75
4	.4	.5	0	-.2	.4	-.1	0	-.4	-.2	-.4	0.31
5	.4	.6	.5	.3	.2	.2	0	0	-.9	-1.3	0.58
6	.5	.3	.2	.2	.4	0	.1	-.1	-.7	-.9	0.43
7	0	-.3	-.7	-.4	-.5	0	.2	-.1	.5	1.3	0.54
8	-1.2	-.9	-.3	0	-.5	.3	.6	.2	.6	1.2	0.69
9	.3	.2	.5	.2	.2	-.3	.3	-.5	-.6	-.3	0.36
S. D.	0.66	0.47	0.39	0.47	0.40	0.16	0.24	0.24	0.58	1.03	0.52

(第2図) 年齢別各色の感じの位置図



赤 R
 橙 O
 桃 Pi
 白 W
 黄 Y
 緑 G
 青 Bl
 紫 Pu
 茶 Bn
 黒 Bk

各 項 { 上 段 4才児
 中 段 5才児
 下 段 6才児

これによると大きい男女差は認められないが、(うれしい—かなしい)の項(つよい—よわい)の項及び(わかい—としより)の項において、女子が男子より明瞭に感じ分ける傾向を示している。

色別の差では、桃、茶において男子、緑において女子がまさる傾向を示している。

年齢別に性差を検討すると、4才児では性差がほとんどなく、5才児から性差が著しくなっている。即ち、4才児の男：女の S. D. は(0.52:0.53)、5才児で(0.48:0.54)、6才児で(0.57:0.64)となっている。

感じの項目別では4才児の(やさしい—こわい)の感じは著しく女子が明瞭で(男0.30:女0.62)反対に(きもちよい—きもちわるい)では男子がまさる。(男0.46:女0.26)その他は著しい差は認められない。5才児では、(うれしい—かなしい)、(きもちよい—きもちわるい)、(つよい—よわい)で女子がまわり、6才児で(あかるい—くらい)、(うれしい—かなしい)、(きもちよい—きもちわるい)、(つよい—よわい)(わかい—としより)のほとんどすべての項で著しく女子がまさる傾向を示している。

色別に検討すると、4才で男子が感じわけのまさる色(黄、紫)、女子のまさる色(青、茶、赤)。

5才で男子がまさるのは(青)のみ、その他は女子がまさる傾向を示している。

6才で男子がまさるのは(白、緑、黒)、女子がまさるのは(桃、黄、紫、茶)となっている。即ち、衣服の色彩など、環境の影響が考えられる。…(以上紙面の都合で表は省略)…

Ⅲ 結果の概括

㊶ 幼児の色についての感じは(赤、橙、黄)と(黒、茶)及び(白、桃)と(紫、青)とが対立している。即ち、共に前者は(あかるい、やさしい、きもちよい、よわい、わかい)の感じに対して、後者は(くらい、つよい、男のような、としより)の感じである。

㊷ 各色に対して感じわけのはっきりしているのは、(あかるい—くらい)及び(男のような—女のような)の対立形容詞で示される感じであり、ついで(やさしい—こわい)である。各色に対して感じわけの明瞭でなく困難なのは、(わかい—としより)、(かたい—やわらかい)である。

㊸ 幼児にとって感じがはっきりしている色は、黒、赤、茶で、ほとんど特色を示していないのは、緑、青、桃となっている。

㊹ 年齢発達と共に色に対する感じわけが明瞭になっている。そして発達著しい色は、桃、黄の色で、4才児からすでに感じの明瞭に発達している色は(黒、赤、茶、白)で色名の知名度とよく一致している。これに対して6才児まで発達しない色は(紫、青、緑)である。

㊺ 著しい性差は認められないが、年齢と共に女子の方が男子にまさる傾向を示している。色別に見て男子のまさる色は(青、黒、白、緑)で、女子がまさるのは、(桃、紫、茶、緑、黄)である。これは子供をとりまく色彩環境の差を示すと思われる。

絵画製作は幼児の造形的な感覚をのぼすために、この時期をはずしてはできない基礎的な能

力の芽ばえをつちかうために、きわめて役立つといわれる。その中で特に色彩や形態についての感覚、即ち、色、形の質感や量感などといった造形的感覚が重要な部分をしめている。しかし、幼児の認知の世界は、外界の事物についての色と形と、それを知覚する幼児自体との力動的体制から浮び出た知的所産である。子供はその未分化な経験の素地の上に何らかの図式をとらえ構成する。そこには情緒も融合している。このような知覚経験をつみかさねて、より明瞭な意味（色、形について性質認知）に分凝していくでしょう。そして、この意味をやがて一定のことば（名）で現わすようになる。このようにして認識分化が進められていく。本研究ではこのような幼児の意味構造の発達を色の名と性質についての認知の発達としてとらえた。たしかに色の認知について未分化性は示しているが、各色の間では著しい発達差が見られ、差異性認知の容易な色彩から分凝していることが伺える。（形についての研究内容の発表は次回にゆずる。）

（此の項終り）

参 考 文 献

1. Charles E. Osgood : The measurement of meaning 1957
2. 古牧 節子, 浅井 正昭 : 言語にあらわれた感情的構造の分析, 第二報
日本心理学会 第23回大会発表論文集 1959
3. 芳賀 純, 大山 正 : 意味微分法による色彩および色名の測定について
日本心理学会 第23回大会発表論文集 1959
4. 山本 和郎, 西村 恕彦, 野村 健二, 鮑戸 弘 : S. D. 法による日本語の意味構造の研究
日本心理学会 第24回発表論文集 1960
5. 金子 隆芳 : 色の見え方の諸条件とその様相
心理学評論, Vol. 3, No. 2 1959
6. 相馬 一郎 : 色彩を利用した精神検査について
心理学評論, Vol. 3, No. 2 1959
7. 矢田部達郎 : 思考心理学, Vol. I 1948
8. 岩原信九郎 : 教育と心理のための推計学, 日本文化科学社 1967